



あいさつをする
高坂忠東京六戸
会会長



◀六戸町のスライド写真の説明をする吉田豊町長
▶最後に参加者で「ふるさと」を合唱



▲東京六戸会総会の会場となった横浜マリントワー
◀横浜マリントワーのすぐ近くにある三崎公園で参加者全員の記念撮影



当会の総会・懇親会が平成24年4月8日(日)に横浜マリントワーで開催されました。

「東京六戸会」たより
第14回東京六戸会総会

115

紹介 お知り合いの方など
東京六戸会入会をご希望の方が
いらしたらこちらまで
東京六戸会事務局 沼澤強
090-8312-9452

沼澤強 七百中(32年卒)

懇親会では、懐かしい故郷のスライドを見ながら、イタリアン料理とワインに舌鼓を打ち賑やかに歓談していました。

吉田町長からは、学業では青森県は全国でもあまり良くないなか、七百中学は抜きん出て成績優秀なこと、全国的には無医市町村が多く、医者不足なのに、六戸は町立病院がありお医者さんにも恵まれている等のご挨拶がありました。

出席者は、最高齢の折館博さん(六戸国民学校高等科を昭和21年に卒業)を筆頭に前会長の出戸巖男さん(24年六中卒)ほか喜寿を過ぎた方々を含め45名が出席しました。来賓として六戸町から吉田町長他、長谷主幹、川村主査にもご参加いただきました。

EXTRA EDITION

『東京六戸人』
history

折館 博 さん

【プロフィール】

▶おりだて・ひろし
81歳 折茂出身
神奈川県川崎市在住



六戸国民学校高等科から青森師範学校(現、弘前大学)へ進学。中退後、警察学校を経て警察。45歳の時に株式会社東芝へと転職し、同社総合研究所管理部で主に社員教育に携わる。現在はひ孫に囲まれにぎやかな毎日を送る。警察官時代には「浅間山荘事件」にも出動した経験を持つ。

『折館は一体何者なんだ!』

～東芝の総合研究所にいた頃に、皇太子さま(現在の天皇陛下)が視察に参られたことがあった。会社の役員たちと一緒にお出迎えの列に加わっていたんだけど、皇太子さまが私

の前でふと立ち止まりになって私の顔を見なされた。実は、警察にいた頃、皇太子さまの身辺警護に就いていたことがあってね。私の顔を覚えてくれていたんだね。とてもうれしかったよ。その一件依頼、『折館は一体何者なんだ』って会社の連中から一目置かれるようになったよ。おかしかったねえ～と、思い出のエピソードを語ってくれた折館さん。一方で、「20歳で東京の警察学校に入学した当時、周りに青森県人は私一人。知り合いは誰もいなかったから、外出しないで本ばかり読んでいた」と、当時の苦勞を語る。「警察学校時代、消灯時間が過ぎると、ふとんをかぶり懐中電灯をつけて六法全書を読んでいた。今でもその頃読んでいた本を大切に持っているよ」と笑ってみせる。

体力にも自信あったようで、警察庁の柔道大会で優勝した経験も。「力だけは強かったし、それにとっても負けずぎらいだったんだ」と、武道は柔道・剣道・合気道を合わせて10段の腕前。「警察官としては当たり前

と謙遜する。

自身、教師になるために努力して進学した青森師範学校を経済的な理由から中退した経験を持つ。戦後、誰もが貧しい時代。学びたくても学べない8人兄弟の末っ子は、実家で家業を手伝いながら、向学心を失わず、警察学校へと入学した。「毎日、農作業を終えると泥だらけの身体を川で流し、その後がむしやりに勉強したよ。」

過保護は決して良い結果を生まない

自分の経験から、「子どもはあまり過保護にしない方がいい」と言う折館さん。「過保護は決して良い結果を生まない」と戒める。そして六戸の子どもたちに「『自分の力を信じる』と言いたい。自分を信じなければ何1つできやしない」と言葉は厳しくも、優しさ溢れる口調でふるさとにエールを送っていた。

⇒『東京六戸人』とは、ふるさと六戸への想いを心の片隅に東京近郊で暮らす人々を指す造語です。